



礼拝における一致

暗唱 聖句

「わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、大声で言った。『神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい!』」
(黙示録 14 : 6、7、新共同訳)

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め!』」
(黙示録 14 : 6、7、口語訳)

今週の 聖句

黙示録 4 : 8、11、マタイ 4 : 8、9、ダニエル 3 : 8～18、黙示録 14 : 9、
黙示録 14 : 6、7、使徒言行録 4 : 23～31

安息日 午後 12/8

今週のテーマ

五旬祭の日から間もなく、初期のクリスチャンたちは多くの時間を割いて礼拝をしました。「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(使徒 2 : 42)。メシアとしてのイエス、旧約聖書の預言の成就としてのイエスを知ることからもたらされる喜びが、神に対する感謝の気持ちで彼らの心を満たしていました。このようなすばらしい真理を知るといのは、なんという特権でしょう。初期のこのクリスチャンたちは、イエスの人生、死、復活における神の啓示と、イエスが彼らの人生の中でなしてくださったことを神に感謝するため、交わり、学び、祈りによって一緒に時間を過ごす必要性を感じたのです。

イエス・キリストの教会は、本質的に礼拝する共同体であり、「生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられ……聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げ(る)」(Iペト 2 : 5) ために、神によって召されたのです。集団礼拝においてあらわされた神への感謝の気持ちは、人々の思いと心を神の御品性に似たものへと変え、奉仕に備えさせます。

今週の研究は、礼拝の意味と、礼拝がいかにイエスの信者の間における一致を保つのかということに焦点を合わせます。

礼拝に関する話し合いにおいて、礼拝に含まれるものや仕方など、礼拝の要素に光を当てます。しかし、深い意味において礼拝とは何でしょうか。神を礼拝するとは、どういうことでしょうか。なぜ私たちは礼拝するのでしょうか。ダビデは詩編 29:2 において、「御名の栄光を主に帰せよ。聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ」と述べています。この詩は私たちに、礼拝の意味を知る正しい方向を指し示しています。主を礼拝するというのは、主がお受けになる栄光と誉れを主に帰すことです。

黙示録 4 章と 5 章を読んでください。天の住人たちは、神と、神の小羊なるイエスを礼拝する理由を述べています（黙 4:8、11、5:9、10、12、13）。また、イエスが神の小羊、この世の救世主として紹介されている、天の玉座の部屋における礼拝の描写は、畏怖の念を起こさせます。礼拝は、神の被造物たちが、神のしてくださったことに礼賛と感謝の言葉で応じるときに生まれます。礼拝は、神の創造と救済に感謝する人間の応答なのです。時の終わりに、贖われた者たちも同じように、神の救いに対する礼賛と応唱に加わるでしょう。「全能者である神、主よ、あなたの業は偉大で、驚くべきもの。諸国の民の王よ、あなたの道は正しく、また、真実なもの。主よ、だれがあなたの名を畏れず、たたえずにおられましょか。聖なる方は、あなただけ。すべての国民が、来て、あなたの前にひれ伏すでしょう。あなたの正しい裁きが、明らかになったからです」（黙示 15:3、4）。

礼拝とは、神の奇跡（第一に、私たちが創造されたこと、第二に、私たちが贖われたこと）に対する私たちの信仰の応答なのです。礼拝において私たちは、神がお受けになる礼賛、畏敬、称賛、愛、服従をささげます。言うまでもなく、私たちが創造主、救い主としての神について知っていることは、神が聖書の中に啓示してくださったことに由来します。さらに、クリスチャンが神について知っていることは、人間としてのイエスと彼の働きによって、より十全に啓示されました（ヨハ 14:8～14 参照）。それゆえ、クリスチャンはイエスを救い主、贖い主として礼拝します。彼の犠牲的な死と復活が、まさに礼拝の中心だからです。

クリスチャンが礼拝に集まるとき、私たちの礼拝は、このような畏怖と感謝の念から生まれるのです。

◆ 私たちの創造主、救い主としてのキリストによって与えられたもの、キリストが私たちが救い出してくださったもの、キリストが私たちに提供してくださるものについて、考えてください。何もかも、キリストが私たちの代わりに進んで死んでくださったおかげです。なぜこういった真実が、あらゆる礼拝の基礎でなければならないのですか。

マタイ4:8、9を読んでください。サタンはおごり高ぶって、自分がこの世の正当な支配者、この世のあらゆる富と栄光の所有者であると宣言し、あたかも彼がこの世を創造したかのように、そこに住むすべての人の敬意や尊敬を要求しました。創造主なる神への、なんという侮辱でしょう。サタンは、礼拝がどのようなものであるかをはっきり知っていることを明らかにしました。礼拝は、宇宙の正当な所有者に誉れと尊敬を帰すことなのです。

問1 ダニエル3章（特に8～18節）の3人のユダヤ人青年の体験と、黙示録13:4、14:9～11の終末時代の権力を比較してください。終わりの時には、何が危機に瀕していますか。

カインとアベルから、バビロンでの3人のユダヤ人青年、そして「獣の刻印」（黙16:2）にまつわる最後の諸事件に至るまで、サタンは偽りの礼拝制度を構築しようとしています。それは人々を真の神から引き離し、さりげなく、サタン自身を礼拝させようとするものです。何しろ彼は、人間が罪に堕ちる前から、神のようになりたい、と思っていたからです（イザ14:14）。3人の青年が「像」を拝まなければ殺すと脅されたように、終末時代に、神の忠実な民も「像」を拝まなければ殺すと脅されることは、偶然の一致ではありません。私たちは真の神を礼拝するように命じられているのに、どうして「像」を拝むのでしょうか。

「ドラの平野でのヘブルの青年たちの経験から学ぶべき教訓は、実に重大である。……神の民はこれらの悩みの時を前にして、揺らぐことのない信仰を持たなければならない。神の民は、ただ神だけが礼拝の対象であること、そしていかに重大なことであり、それが生命そのものにかかわるものであっても、彼らを偽りの礼拝に少しでも妥協させることはできないことを明らかにしなければならない。忠実な心の持ち主にとっては、罪深い有限な人間の命令は、永遠の神の言葉と比較する時に、全く無意味なものになってしまうのである。たとえ投獄と追放の憂き目に遭い、死に処せられても真理には従うのである」（『希望への光』577、578ページ、『国と指導者』下巻120、121ページ）。

◆ 私たちは現在において、どんな方法で礼拝に値する唯一のお方よりも、ほかのだれかを礼拝するように誘惑される可能性がありますか。私たちが自覚している以上に、偽りの礼拝は、いかに脅威になりえますか。私たちが今でも礼拝するように誘惑されるものには、どんなものがありますか。

セブンスデー・アドベンチストは、黙示録14:6～12の三天使の使命が彼らの宣教と、イエスの再臨の直前に伝える彼らのメッセージの核心部分を描いているとみなしています（黙14:14～20）。これらは、地球の全住民に「大声で」宣べ伝えられるべき重要なメッセージなのです。

黙示録14:6、7を読んでください。三天使の使命の第一番目は、全世界に一つのメッセージを宣布します。それは、マタイ24:14におけるイエスの預言の成就です。これら3人の天使と彼らのメッセージの描写には、切迫感や緊迫感があります。第一のメッセージは、神に注目するよう人々に訴えかけています。なぜなら、「神の裁きの時が来たからである」（黙14:7）。イエスの再臨は、この裁きを引き起こすものです。

「神を畏れ（よ）」（黙14:7）と、天使は言います。神を真剣に受け止めない人たちにとって、このメッセージと行動への呼びかけは、彼らの心の中にきつと恐れを生み出すことでしょう。しかし、イエスに従ってきた人たちにとって、この呼びかけは畏怖と尊敬の勧めです。彼らは神を尊敬しており、神の約束の成就を見ます。神に対する感謝にあふれる畏敬の念が彼らを襲います。

「天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」（黙14:7）。この言葉遣いは、紛れもなく、天地創造への言及を伴う安息日の掟へのほめめかしです（出20:8～11参照）。天地創造の神、御自分の創造の力の記念として安息日を制定された神は、礼拝と礼賛を受けるべきお方です。

興味深いことに、終わりの時には、礼拝が人類の忠誠を巡る大争闘における主要問題とみなされています。この世界規模の告知は、創造主を拝むようにという命令です。

「最終の危機における中心的問題は、礼拝であろう。黙示録は、そのテストが礼拝の拒否ではなく、だれが礼拝されるかであることを明らかにしている。終わりの時には、この世界に二つのグループの人たちしかいない。真の神を畏れ、礼拝する人たちと（黙11:1、18、14:7）、真理を嫌い、竜と獣を礼拝する人たちである（同13:4～8、14:9～11）。

もし礼拝が最後の戦いにおける中心的課題であるなら、神が地球の住民たちに最終時代の福音をお送りになるのも不思議ではない。それは神を真剣に受け止め、創造主への礼拝に値する唯一のお方として神を礼拝するようにと促す福音である」（ランコ・ステファノービック『イエス・キリストの啓示——黙示録注釈』444、445ページ、英文）。

「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(使徒2:42)。礼拝は、教会の初期から、使徒たちによる聖書研究が中心であるという特徴を持っていました。初期のクリスチャンたちは、メシアなるイエスについて聖書が言っているのかを知ろうとして、忠実に研究したのです。神が与えられた祝福を互いに分かち合い、神との霊的歩みにおいて励まし合うため、絶えず交わりました。彼らは御言葉を調べ、この世に告げるメッセージの基礎となった聖なる真理を得ました。

問2 ほかの信者との交わりの中で神の言葉を研究する重要性について、次の聖句はどのようなことを述べていますか。

列王記下 22 : 8 ~ 13 _____

使徒言行録 17 : 10, 11 _____

Ⅱ テモテ 3 : 14 ~ 17 _____

「福音の真理が宣べ伝えられるところではどこでも、正しいことをしたいと心から願う人々が、聖書を熱心に調べるよう導かれる。この地上の歴史が閉じられようとする状況にあって、特別の真理を聞かされる人々が、ベレヤの人々の模範に従い、日々聖書を調べて、神のみことばと彼らに伝えられた使命を比べようとするならば、神の律法の教えに忠実なものが、いま比較的少数しかいないところに、今日、もっと多くいるはずである」(『希望への光』1443 ページ、『患難から栄光へ』上巻 249、250 ページ)。

私たちが結束した民であるのは、宣べ伝える真理や、神の言葉の中から見いだす真理のゆえです。このことは、初期の神の教会にも、今日の神の教会にも当てはまります。神の言葉の研究は、神に対する私たちの礼拝と、三天使の使命を世に宣べ伝えるために召された民としての一致、その両方の核を成すのです。私たちが家族として交わりと礼拝のために集まるとき、聖書は、宣教とイエスの再臨に備えるうえで私たちの生活の指針となる神からの言葉を語りかけてきます。

◆ あなたはしっかり、私たちが(聖書から)信じていることに根差していますか。3人のユダヤ人青年のように、死を目の前にしても揺るがないほど、あなたは聖書に根差していますか。

初代教会がどのような課題に直面していたにせよ、彼らはイエスに対する共通の信仰と、この世に広めるようイエスから託された真理において一致していました。その真理は、ペトロが「授かった真理」(Ⅱペト1:12)と呼んでいるものです。そういうわけで、この真理において結束していた彼らは、さまざまな形で彼らの一致をあらわしました。

「彼らは、……パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(使徒2:42)。パンを裂くことへのこの言及は、たぶん交わりの食事か、信者間で定期的に分かち合った食事を指しているのでしょう。交わりの食事の途中で、だれかが、イエスの死と復活を追悼し、イエスの速やかなお戻りを期待して、パンと飲み物のうえに特別な祝福の祈りをささげたことでしょう。このように初期のクリスチャンたちは、イエスの人生と働きの意味を思い出すために時間を割き、交わりの食事の際にそれについて語り合うことが大好きでした。彼らが分かち合った食事は、礼拝の時間になったのです。「そして、毎日ひたすら心をつ一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」(使徒2:46、47)。間違いなく、この交わりの時は、彼らがイエスにおいて持っていた一体感を強めるのにとっても役立ちました。

問3 使徒言行録の中には、初期のクリスチャンたちが一緒に祈ったどのような実例がありますか。彼らは何を祈り求めましたか。使徒1:14、4:23～31、12:12 参照

初代教会は神と直接対話する機会を大事にし、礼拝のために集まったときには、神に嘆願することを決して怠りませんでした。テモテへの最初の書簡の中でパウロは、クリスチャンが集まったときの祈りの大切さに触れています(Ⅰテモ2:1)。彼はまたエフェソの信徒に、祈りの必要性を強調しています——「どのような時にも、“霊”に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。……わたしのためにも祈ってください」(エフェ6:18、19)。

◆ 同じ目的のための執り成しの祈りの力を通して、いかに私たちはより強い一致を体験することができますか。このような祈りは、教会としての私たちを一致させるうえで、いかに助けとなりますか。

『創造の記念としての安息日の重要さは、われわれがなぜ神を礼拝すべきであるかという真の理由を常に考えさせるところにある』。すなわち、神は創造主であって、われわれは神に造られたものだからである。『それゆえに、安息日は、礼拝の根底そのものである。というのは、安息日が、他のどんな制度よりも、最も感銘深い方法で、この大真理を教えているからである。7日目における礼拝だけでなく、すべての礼拝の真の根拠は、創造主と造られたものとの区別にある。この大事実は、決して廃することのできるものではなく、また決して忘れてはならないものである』。神がエデンで安息日を制定されたのは、この真理を常に人々の心に留めておくためであった。

そして神がわれわれの創造主であるという事実が、神を礼拝する理由として存続するかぎり、安息日は、そのしるし、また記念として、存続するのである。安息日がすべての人に守られ、人間の思いと愛情が、礼賛と礼拝の対象としての創造主に向けられていたならば、偶像礼拝者や無神論者や不信心者は決してでてこなかったことであろう。安息日を守ることは、『天と地と海と水の源とを造られた』真の神に対する忠誠のしるしである。それゆえに、神を礼拝し神の戒めを守ることを命じるメッセージは、特に第4条の戒めを守るよう人々に呼びかけるのである』（『希望への光』1807ページ、『各時代の大争闘』下巻156、157ページ）。

話し合いのための質問

- ① 礼拝、創造、救済といった聖書概念は密接に結びついているので、安息日を祝うことは、いかに偽りの礼拝に対する神の対抗手段になりうるかと、あなたは思いますか。黙示録14:6、7の終末時代の預言において、安息日はどんな役割を果たしますか。第一天使の使命の中で、なぜ安息日が言及されているのでしょうか。
- ② 私たちはしばしば、内容（礼拝の中ですべきことやすべきでないこと）の問題として礼拝について語ります。それで十分でしょうか。そもそも礼拝とはどういうものなのでしょう。あなたが所属している教会は、いかに意義深い礼拝を体験していますか。

まとめ

礼拝は、救いの賜物を神に感謝するキリスト教信徒の応答です。礼拝はまた、キリスト教共同体が一致と交わりを体験するのに不可欠な要素です。私たちのための神の真理を知りたいという願いから祈り、聖書を研究しなければ、私たちの共同体はキリストにおける一致を体験できないでしょう。